

資料館 だより

Miyako
Kitakamisanchi
Museum of Folklore

No.24

平成30(2018)年
3月31日発行

宮古市北上山地民俗資料館

〒028-2302 岩手県宮古市川井 2 - 187 - 1
Tel. 0193 - 76 - 2167 Fax. 0193-76-2933
<http://kitakamisanchi.city.miyako.iwate.jp>

◆第20回企画展記念講演会を開催 H29. 10. 31

第20回企画展「昔はどんな道具だったの?～教科書に登場する有形民俗資料～」の記念講演会を平成29年10月31日に開催しました。講師は物質文化研究所一芦舎代表で元岩手大学人文社会科学部博物館学非常勤講師の名久井文明さんです。小、中学校の国語、社会、理科の教科書に出てくるさまざまな昔の道具171点について写真を紹介しながら、道具の使い方や時代背景などを解説しました。講演では、教科書に登場する民具を実際に見たり触ったり動かしたりすることで、教材に対する理解がより一層深まるなど、学校授業等で利用してもらうために活用の仕方について、展示見学だけではない、これまでとは異なる観点を示していただきました。また40名が参加しましたが、参加者からは、「使われなくなった道具でも、ことわざや慣用語に残っていて意外と身近に感じた」などの感想が寄せられました。

なお、この講演会で配布した講師より寄せられた資料と同じ内容を、3月31日発行の調査報告書に掲載しています。県内図書館等にも配布していますが、残部等は当館までお問合せください。

第20回企画展を多くの方々に見ていただきました

第20回企画展は、平成28年10月の開催予定だったところ、台風10号の影響により年度末の開催となり、およそ1年の会期の中に、多くの皆さんに見学していただくことができました。今回の企画展は名久井氏の調査により開催することができましたが、教科書に昔の道具がたくさん出てくることが分かり、学校に向けた活用のPRを工夫していかなければならないと痛感しています。会期中には、市内の5校から見学に来ていただき、小品製作の体験も行いました。また、10月14～15日に行われた宮古市社会経験者大学大学祭の会場で、一部の資料を展示させていただくことができ、昔懐かしい資料をたくさんの方々の皆さんにもご覧いただくことができました。今後は館内に「教科書に登場する民俗資料」のコーナーを設け、常設展としていく予定です。

講演会に寄せられた感想を紹介します。

「・・・民具など民俗文化財は地域から離され、博物館など施設に収納・陳列されると、本来の役目は終了し、“生きている”ことはないのですが、資料館の民具＝民俗文化財はいまも生きていると感じました。あの「鉞」から木を切る音が、雑木林の谷間にこだまし、「鋸」からは木挽きの音が聞こえ、木屑から木香が出ていました。あの「鉤」に鮭がかかり、暴れる振動が紅葉の森に響いていた。あの「蓑」「笠」を身に着けた人が、籠を背負い、雑木の森を歩いていて、きのこ採りか、栗拾いか。

晩秋の農家の庭先では、蕎麦、稗の脱穀か、乾いた大きな音がしている。

“生きている”と感じるのは、展示されている文化財の説明板。寄贈者が実名で表示され、民具を作った人、使用した人がまだ健在なためでしょうか。何より、地域の人々が、実際の生業、生活のためと同じく、民具を作り、使用方法を人々に周知し、本来の目的を忘れないように研修していることが最大の理由でしょう。・・・」宮城県涌谷町 伊藤源治様(文化財保護委員)より



第20回企画展記念講演会「教科書に登場する民具～有形民俗資料の活用～」の様子
(講師 名久井文明氏 写真左、下)



企画展示室で教科書に登場する昔の道具を見学

◆市内有形民俗資料の一括管理について

平成29年度、宮古市の収集施設に分散して管理していた有形民俗資料を、北上山地域民俗資料館小国分館で一括管理することとなりました。これにより旧宮古市、田老町、新里村で収集され、旧臺目中学校で保管されていた民具を当館小国分館に移設する作業を行いました。移設した資料の点数は3,700点あまりで、沿岸部の特徴でもある漁具や、商店で使われた道具など多岐にわたります。小国分館では、これまでと同様に文化財用防虫剤を設置しながら定期的にくん蒸を行い、保存管理に努めてまいります。また、集約した資料について資料台帳を作成し、整理を行いながら活用に向けた準備を行います。今回、小国分館収蔵の有形民俗資料の数は7,000点を越え、館蔵資料の総数はおよそ12,000点となりました。「森、川、海と人とが共生するまち」を掲げる宮古市で収集された有形民俗資料が一堂に会したこととなります。今後は、移動展を開催して収蔵資料を紹介したり、また、小国分館を会場に有形民俗資料を活用した体験学習を行っていく予定です。



小国分館(旧小国中学校体育館)に移設した有形民俗資料

◆伝統的食文化伝承講座を開催しました

H29.11.7、12.1

当館では、地域に伝わる郷土食を伝承する講座を開催しています。

11月7日は、昔作られていたアワだけの餅つきを行いました。この地域では多くの水田が開かれたのが終戦後であるため、以前の餅はアワで作られました。モチゴメで作る餅は熱いうちに搗きますが、アワは蒸した後で少し冷ましてから搗きます。そうしないと、臼や杵にくっつくくらいの柔らかい餅になってしまうのだそうです。また、12月1日には、川内地区の郷土食グループである川内やまびこ会の皆さんに教わって、地元の特産品であるマイタケを使ったおこわを作りました。代表の柏榮子さんは岩手県の食の匠に認定されています。25人が参加しましたが、ニンジンを入れるタイミングや冷凍マイタケの下ごしらえなど、コツをメモしながら熱心に教わりました。



アワ餅つきの様子



マイタケのおこわ作りの様子

◆森の体験学習会など各種講座を開催しました

「かわい木の博物館」と連携して、第9号館大樹の森を見学して実際の樹木を観察しながら散策を行い、その後当館に移動し、樹木を利用して作られた民具を見学しました。今年は秋の開催で、あいにくの強風でしたが、9名の参加者は紅葉の景色を楽しみました。

ほかにも、年中行事やそれにかかわる製作技術を伝承する目的で、

「ウマっこつなぎ」、「しめ縄作り」、「小正月の削り花」の体験学習を行いました。



「ウマっこつなぎ」を作る様子



小正月の削り花作りの様子



木の博物館「大樹の森」の見学



「左縄」をなつてしめ縄を作る様子

◆小品製作体験から

当館では「昔の技術と自然の素材で小物作り体験」をテーマにもの作りができるメニューを用意しています。体験の内容は、樹皮を素材にした小さなかご作りや、昔の道具を使ったコースター作りなどで、大人から子どもまで楽しむことができます。小学校3年生では、「昔の暮らしの道具」について学びますが、その一環で見学にお越しいただき、樹皮を素材にした壁かけやコースター作りの体験をした小学生から感想文が寄せられましたので、紹介します。

●「ぼくたち3年生は、北上山地民俗資料館に行き、昭和の暮らしを調べました。畑のたかやし方や昔の道具について説明をしてもらったり、てんじ物をじっくり見たりしました。

ぼくが心にのこったことは2つあります。1つめは、かべかけ作りです。木であんでたいへんでした。糸で2しゅうしてからまっしてしまっただけど最後までできてよかったです。・・・」

(山口小学校3年生の男子児童より)



樹皮の壁かけ作りの様子

●「・・・この間見学をしてふみすきという道具をはじめてしりました。昔の人はくふうして木のみきと枝と鉄でじょうぶにつくっています。すごあみ台のコースター作りではからまったりしてむずかしかったけどじょうぶにできました。今おうちで使っています。・・・」

(藤原小学校3年生の男子児童より)



【すご編み台】でコースター作り



樹皮でミニかご作りの様子

館内で実施しているほかに、出前講座にも対応していて、今年度は、崎山貝塚縄文の森ミュージアムや浄土ヶ浜ビジターセンターなどに出向いて体験学習を行いました。

◆宮古市北上山地民俗資料館ホームページ <http://kitakamisanchi.city.miyako.iwate.jp/>

当館が実施した事業の様子や、「資料館だより」のバックナンバーを掲載しています。体験メニューの詳細や国指定重要有形民俗文化財「北上山地川井村の山村生産用具コレクション」に指定された資料の実測図や写真も紹介していますので、是非ご覧ください。

◆夏休み・冬休み工作教室を開催しました

夏休み工作教室では、「紙漉き屋 群青」を主宰している栗橋くみ子さんを講師に、6名の参加者が紙漉き体験を行いました。栗橋さんはこの地域でかつて行われていた「閉伊川和紙」について伝承していきたい



紙漉き体験の様子

という思いで活動しています。受講生は、コウゾの皮剥ぎから体験し、ハガキ大のカードを仕上げ、乾燥を待つ時間にオリジナルの消しゴム判子作りにも挑戦しました。

冬休み工作教室では、機織り機の台を使わない昔ながらの方法で平織りを行い、小物入れを



体にたて糸を固定して織る作業の様子

作りしました。この体験は当館で行っているメニューの一つですが、もとは岩手大学人文社会科学部博物館学実習の講座で行われていたもので、名誉館長の名久井芳枝氏の調査が元になっています。受講生は好みの色のよこ糸を選び、思い思いの飾りをつけて作品を仕上げました。

◆ご協力ありがとうございました

【資料寄贈】平成29年4月1日～平成30年3月31日まで
門口春男様、小松平信一様、佐々木誠子様、佐々木富治様、武内寛様、館下寿男様、中村哲様、濱崎弘様、細越満孝様、向口正喜様、かわい職人有限責任事業組合様

【資料調査】(同期間)
新田サト様
中里久美江様
田代念佛剣舞保存会様



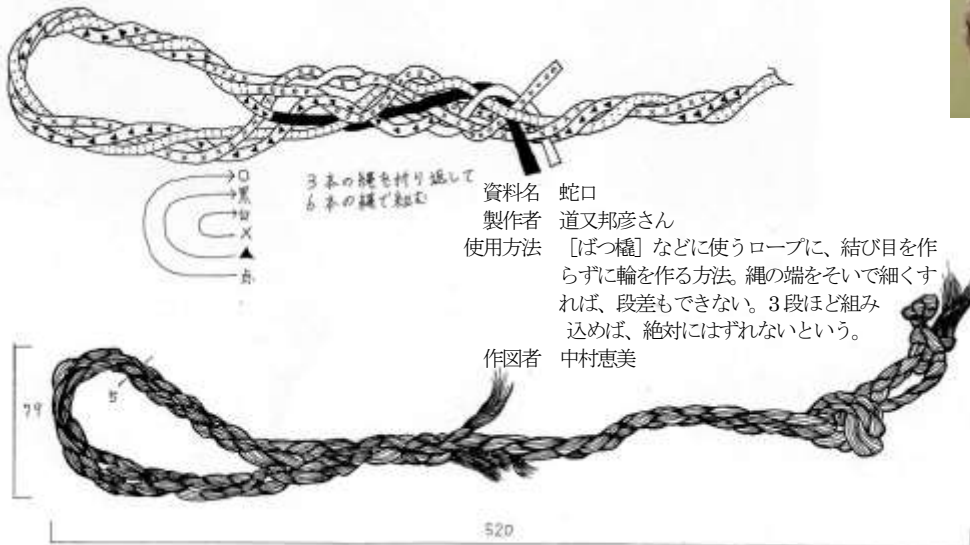
郷土芸能の衣装着付けの記録作業の様子

◆平成29年度の入館者数

(人)

一般	学生	小・中・高	団体	合計
936	5	75	330	1,346

紐の編み図



↑【ぼつ櫓】に使われている蛇口

「蛇口」について 中村恵美
 今回私が描いた「蛇口」は、結び目を作らずにロープを輪にする方法で、素材はワラです。三本撚りの縄の端を解き、輪を作ってから一本ずつ芯となる縄に組み込んでいきます。
 ワラの素材の道具を実測するのは一回目でしたが、素材が軟らかく撚りがかかり、さらに組んであるので、計測がとて難しいと感じました。何度でも組まれている縄をゆるめて構造を確認しました。見ただけではどのような作りかは分かりませんので、構造を観察して実測図を描くことにより、それが記録されて伝達されることに繋がると改めて感じました。
 「蛇口」はとても丈夫でほどけにくく、結び目のこぶができないので扱いやすいため、昔は「櫓」で丸太を運ぶときに使われたそうです。現在でもトラックの荷台の荷物を固定するときなどに使われます。昔からの技術が今も役立っていることがわかり、他の民俗資料についてもそう思いますが、昔の人の知恵と工夫にはとても驚き、感心させられます。

◆北上山地民俗資料館ボランティア養成講座

このページで紹介した実測図は、ロープに、結び目を作らずに輪を作る方法で「へびぐち」と呼ばれます。当館ではボランティア養成講座として、「暮らしに役立つ結び方教室」を開催しました。ほかに、「はた結び」や「巴結び」など民俗資料に見られる結び方を地元の講師から教わりました。当館の活動にご協力くださるボランティアには、「小国分館友の会」の会員の皆さん、また個人で協力してくださる方々もおられます。今年度は、養成講座を6回開催し、展示解説や体験学習補助の活動に役立てていただくことができました。「小国分館友の会」は地域の伝統的な生活技術や食文化などを伝承することを目的に活動しています。どなたでも参加できますので、興味のある方は当館までお問合せください。



先進地視察（住田町民俗資料館へ）



樹皮の壁かけ作り体験教室の様子



ボランティアによる展示解説



「結び方教室」で荷台に荷物を固定するときの結び方を教わる